

ニホンザルにおける社会的行動の発達

—とくに再出合わせによるペア間

相互交渉の変化過程—

高橋たまき

(日本女子大・一般教育)

南 徹弘(東京女子大・短大)

前年度と同一のペアを9月と翌年3月の2回にわたり観察した結果、およそ次のような事実が見出された。

1才：9月における出合わせの最初の頃には、雌雄ともに位置固定性の常同行動が顕著にみられたが、日時の経過にともない、次第に位置移動性の行動が増加した。これらの行動が rough and tumble play へと変化することも観察されたが、単に体をぶつけ合うような単純で、一過性のかかわりであった。雌は雄の行動に敏感に反応し、雄の接近に対してすでに劣位行動を示した。このような行動傾向は、3月期の観察においてもほぼ同様に認められた。

2才：雌は雄の接近に必ず回避行動を示すことによって、敏感に反応した。9月期には雄の接近その他の行動に対して、雌の screaming が多く発生したが、3月期の観察では2ペア中1ペアの雌ではそれが消失した。また、9月期に比べると3月期では運動量が極めて増加し、とくに社会的なかわりの増加が顕著であった。雄は雌よりも活発であり、mounting に類似した行動を示す個体もあった。しかし、これが遊びの一種としての mounting なのか、性行動であるのかは不明であった。

3才：雌雄が相互に近い位置を占めることが多くみられた。また相互の looking がしばしば観察された。雌からの接近も多く、雄から雌への grooming もみられた。雄の接近に対して、雌ははっきりと presenting を示し、それに対して雄も明確な mounting を示した。この点に関しては優劣関係の表出が明確で、成体における雌雄関係に類似していた。1・2才ペアと比較すると、個体間関係が成体相互のかかわりに近く、安定性も持続していた。また、auto-grooming も時々みられた。

この研究で用いられたサルは、隔離飼育されているために、総じて auto-grasping, auto-sucking, rocking 等の常同行動がしばしば観察された。

ニホンザルの音声の発育に伴う変化

川 道 武 男(大阪市大・理)

南 正 人(大阪市大・理)

ソナグラフをもちいて発育に伴う音声の長期的変化を追跡した研究はない。私達はこれを目標に今年にはアカンボの音声レパートリーを録音した。京都嵐山群と長野地獄谷群の1才未満個体の音声を、個体識別をもとに録音した。テープコーダーは Sony EM3, 集音器付のマイクはサルより約1m離れた。ソナグラフ Kay 7030A は 80-8000Hz, ワイドバンドをもちいた。

嵐山群の11頭(♂3, ♀8)から生後6カ月までに943声、地獄谷A群の9頭(♂4, ♀5)から、9月上旬に70声を録音した。前者の155声と後者の28声のソナグラムを分析した。

アカンボの音声は基本周波数が高く、激しい周波数変動をしばしば伴う。基本周波数は150-7000Hzで、1-14音節よりなる。1音節は0.01-1.10秒であった。11タイプに大きく分けられ、Rowell & Hinde(1962)の分類に従えば、5タイプが harsh noise で、残りが clear call であった。

並行して録音されたオトナザルの音声と比較すると、次の変化が推測された。1) 基本型が変化せず、基本周波数が低くなる(悲鳴やホイー等)。2) ある音声は稀になるか消失する(母を呼ぶようなホイー、ムー等)。3) 似た型の音声で、異なる状況に発せられる(授乳を拒まれた時の音声は、オトナザルが泣き面で出す音声に似るし、punishment を受けた時の音声はメスの性行動の音声に似る)。4) アカンボ期には聞かれない(1才以上が出す攻撃的なガ・ガ・ガ)。

Green(1975)が例示したアカンボの音声はすべて確認された。飼育下の観察による Takeda(1965)のF-stock または川辺(1973)のVGⅢは聞かれてなかった。ソナグラムの構造による分類は、聴覚的に分類した Nishimura(1973)と基本的に一致をみた。